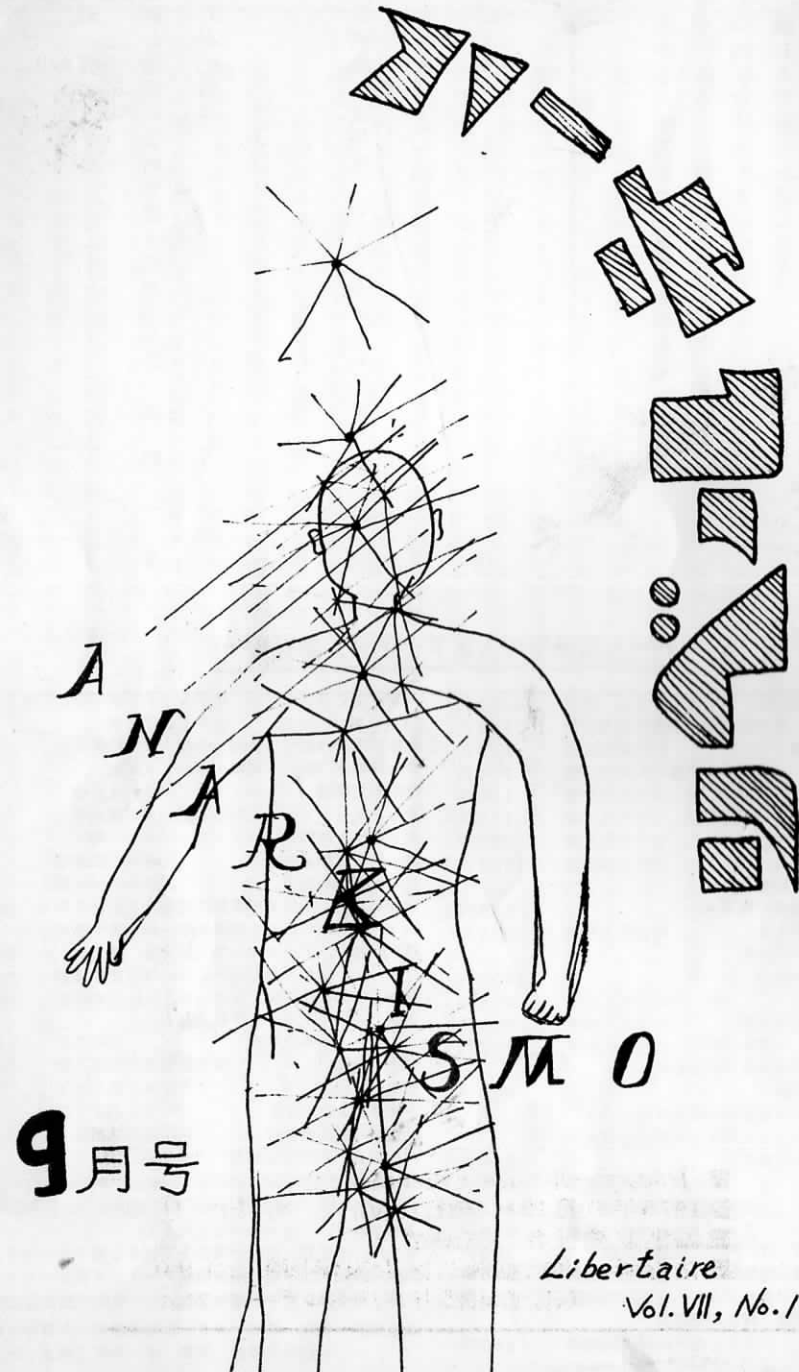


昭和45年 9月 4日 第三種郵便物認可
昭和51年 9月 15日 発行 第80号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)



- リベルテール Le Libertaire
- 1976年 9月15日 発行 Vol. VII, No. 10
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町 2190 萩原晋太郎方 リベルテールの会

近頃、新聞で表記の言葉を知った。用法はジャーナリストチックに「誰々（一党）のガバナビリティを問う」というように使用され、興味深いのは、卅年来日本国民を統治してきた、自信に溢れる保守政の発言であることだ。例によって政治家の先取り精神によるとか、自意識の顕れで危機意識をあおるものだと行ってしまえばそれまでだが、一考に値する。世の中、議会制民主主義だからガバナビリティの対照語は「国民の負（付）」託に答えるというものである。そこでこれを組合せると「選挙の投票による国民の負託に答えて、統治能力を発揮するのが期待される政治家」ということになる。すると反論がでて選挙民がセンセイ、センセイと代議士をおだてるのは、地域の為に働かせているのであって、実質は選挙民が主人なんだ。いやそうじゃない、新潟の越山会をみて判る通り、地域開発は中央を動かす実力者がでて実効する。政治家だって馬鹿じゃないそれこそ持ちつ持たれつの関係なんだ。だから実力者が失脚すると眷族一同が路頭に迷うから是非再出馬を願う訳だ。等、にぎやかではある。だがガバナビリティは狭義には利害の調整能力とみえるが、その最高の姿は民衆に対する権力の行使。それは昔から税の収奪と司法検査の実力行使として現れる。そこでもっともスッキリしたそれこそガバナビリティのある統治形態は、外からの侮りを受けず国民から恐れられる形として、現在の韓国の政治状況のようなものを指すかも知れない。或は中央権力機構が一枚岩の社会主義国もガバナビリティのある国家といえよう。しかし民衆の自由にとっては国家・政府にガバナビリティのあるのとないのとどちらがよいのだろうか。政府はなにに越したことはないとする立場を一応カッコにくるとして、また国家は必要悪でやむを得ないとみる立場をとるにしても、民衆にはガバナビリティのない国家・政府こそ最高に望ましいのである。なぜならそれがなくても日常生活は一向差しつかえなく進行するし、むしろ政府のガバナビリティは諸物価の値上げを承認し大企業を保護することしかないのだから、それが欠如して民衆にすべてが委せられ自分でやるしかなければ、それこそわれわれは手に唾きして、自分達のガバナビリティ（利害の調整能力）を発揮するのは間違いないのである。自由自治はそこから始まる。

（莫空人）

ガバナビリティ（統治能力）のこと

告
古からの活動家で『風雪を越えて』の著書がある山口健助さんが9月20日死去との知らせがありました。謹しんでお知らせします。

告

巻頭言	1
天皇制と靖国について思うこと	2
ベトナム反戦兵	2
▲ケネス・ライザーの裁判	8
鈴木光一	8
江川允通氏に連帯を	10
ハギシン	10
野火	11
海外だより	13

人類更生の大道アナキズム研究書

大杉栄主幹・労働運動・第1次〜第4次 復刻	5,000円	何が私をこうさせたか 金子ふみ子獄中手記決定版	2,400円
純正無政府主義 農村社会革命講座八太舟三著	150円	解説：瀬戸内晴美 金子ふみ子歌集	500円
階級闘争の誤謬 八太舟三著	130円	権藤成郷著作集2 農村自教論・日本農制史談	3,000円
無政府主義 人類解放の道 八太舟三著	700円	大杉栄秘録 増補 堀保子ほか19氏著	1,000円
無政府主義相論 馬拉テスタ著	150円	無政府主義論 エンリコ・馬拉テスタ著	300円
選挙戦に際して 一付略伝一 馬拉テスタ著	150円	ディナミック 石川三四郎個人紙復刻版	3,000円
農民の中へ 馬拉テスタ著	200円	アナキスト革命 ジョージ・パレット著	150円
マフノの農民運動 石川三四郎著	150円	西洋社会主義運動史 石川三四郎著	1,000円
ベルテロー著ノ山鹿泰治訳		ロシア革命の批判 Aベルクマン著	200円
平民の鐘 無政府の福音一	150円	黒色青年 黒色青年連盟機関紙 大正15年	2,500円
無政府主義者は答える 岩佐作太郎著	150円	創刊号より昭和6年終刊号まで復刻	
石川三四郎ほか三氏著		黒色戦線 アナキズム文芸思想誌 第1次	5,000円
日本無政府主義運動史 第一編	350円	昭和4年創刊号より終刊号まで復刻	
反逆者の牢獄手記 大杉・朴烈ら十二氏著	200円	労働運動第5次昭和2年復刊号より終刊号復刻	<近刊>
獄窓から 増補決定版一 和田久太郎著	800円	差別とアナキズム・水平社運動と	
死刑囚の思い出 増補決定版 古田次郎著	700円	アナ・ボル抗争史 宮崎晃著	1,600円
一、二皇居発煙筒事件訴訟記録一		君民共治論 権藤成郷著作集第3巻	3,000円
天皇制破壊への渦動	300円	無支配への道 馬拉テスタ著作集1	300円
植谷雄高氏の天皇批判の証言収載		アナキズムのABC ベルクマン著	100円
雑誌労働運動（大正13年3月号発禁を復刻）		古事記神話の新研究 石川三四郎選集1	2,200円
大杉栄・伊藤野枝追悼号	400円	<解説・石川三四郎論 大沢正道>	
漫文・漫画 大杉栄・望月桂共著	1,000円	〒372 群馬県伊勢崎市市中町和田 電0270-24-0776	
自治民範（全） 権藤成郷著作集 第一巻	3,000円	郵便振替口座 宇都宮 11015 黒色戦線社 大島英三郎	
正義と道徳 クロボトキン著麻生義訳	250円	東京事務所 電03-735-1246	
難波大助大逆事件 虎ノ門で現天皇を狙撃	900円	〒144 東京都大田区西蒲田7丁目61番8号エンリコビル4階	
弁証法的唯物史観の批判 石川三四郎著	150円	国鉄蒲田駅西口下車、蒲田銀座アーケード街歩いて5分突き当り	
無政府主義とサンジカリズム 石川三四郎著	150円	左隣、毎月第2、第4日曜午後1時より4時共学読書会、初心者に公開	
進化と革命 補正版 付石川書簡集		販売書店 東京、神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・	
ルクリュ著 石川三四郎訳	150円	早稲田文献堂・京都、中・寺町二条上・三月書房	

天皇制と靖国について思うこと

三 浦 精 一

京都の厚見民恭君から「天皇制と靖国」（現代書館発行）を送って来た。有難う。

シコシコと続けられた竜谷大学靖国研究会の活動の成果で、二葉憲香、梅原正紀編著、内容は梅原正紀、二葉憲香（学長）、野坂昭如、竹中芳、力久隆積、秋山清、丸山邦男、福島寛隆、高石史人、清水雅人の諸氏の文に座談会（梅原正紀と竜谷大学靖国研究会同人）と資料が加えられている。

紹介とか書評とかいうのでなく、深く心引かれたこの本を中心に、いつものようにペンの進むにまかせて勝手気儘に書きなぐることにする。

この本に心ひかれたというのは、僕が生れた家が西本願寺系の門徒で、報恩講に属した信仰の厚い祖母に育てられたので浄土真宗は僕にとっては、いわば魂のゆりかごだったからであり、僕の叔父も終生しんらんを研究していて、僕との対話にはつねにしんらんが出ていたせいもあるだろう。

この祖母の祖父に対する唯一のなげきは、祖父の不信心で、「わたしが死んでも念仏一つ上げてはくれないだ

ろうし、精進もすることはないだろうから、せめてどなたかお上人様の日に死にたい」と言っていたという。そして死んだのは十二月十九日、僕が小学校の一年の暮である。祖父は誰とかの命日だと言ったがおぼえていない。祖母の死に心折れてか仏壇の前に座って経文を読む祖父の姿を忘れることは出来ない。

祖父と二人の生活の中で、毎晩の晩酌で上機嫌になって高声に祖父が話したことは、その崇拜した福沢先生の話であった。手垢に汚れた福翁自伝、福翁百話は祖父の愛読書であつた。この祖父は若い日、産を破って「二度と広島に帰るな」と怒る姉の声を後に対馬に流浪して小作人になるが、その前に、浅野藩の進歩的学者で切腹を命ぜられた亀田大隅とかの牢番をしたことがあり、この大隅に愛されて英語の単語を習ったとかで、少しばかりおぼえていた。

こうした亀田大隅、福田先生、そしてしんらんの影響もあったのだろう。ある時のこと、僕が小学校で、五年生だったはずだ。先生から、万世一系の日本の国体の尊厳に比してイギリスでもドイツでもロシアでもその皇室の祖先は盗賊や海賊だと聞いた。それを祖父に話したところが、祖父は、「日本だって同じなんだ」と言った。これは子供の僕にとって大きなショックだった。高い知

性を持ちつつ貧しく生き、人に欺かれたことはあっても人を欺いたことはないと誇った祖父だった。

後にキリスト教徒となっても、皇室、神社、そして宗教の問題は絶えずつきまとった。石川さんに古代史をやれと言われて戸惑いながら愚直に続けた勉強は文化人類学や社会学を主としたもので、宗教の問題がつきまとった。民族にとって宗教はその環境の解釈、その環境への適応、そしてその環境の中で生き抜いて行く知恵を含むものであった。日本の神話におけるように征服者の支配を確立するためにつくられたものもある。征服被征服あるいは混入した要素もありいろいろに変化はあっても、人間がそれによって生きる知恵を、民衆としてはその民族の反応や行動のパターンを構成するものとなっている。十九世紀的な唯物論を鵜呑みにするのも、若さの故に致し方ないとしても、単純に神を否定して、宗教を否定したような気になっている者が多いのはおかしい。神は無くとも宗教はある。仏教などは根本的には無神論だとも言われている。無神論者と言われるヨーロッパの思想家たちでも、その道徳観念は長い間ヨーロッパを支配したキリスト教のそれから一步も出ていないし、同じことはアジアの諸国で生長した人々についても言える。日本でも明治以後ヨーロッパ文化を受け入れて以来、それが

新旧の相剋という形であらわれていることは人の知る通りである。宗教は社会の中での構造の根幹をなすものだからである。それは幼少の時代から自己の中に形成されたものとして個人の思想と行動の一つのパターンとなっている。

宗教は外の世界（主として科学の対象となる物質的世界）に対して内なる世界（外なる世界に精神的に対応する生命の世界）の在り方の観照とも言える。だから神の有無にかかわらず、有為転変の世に生き抜かねばならぬ人間の知恵の営みとして、人間の社会における一つの構造として存在する。だから、自己を形成した歴史的、地理的環境を熟視すること、そこに宗教への理解も生ずると言えるだろう。仮りに、すべてを物質だと信ずるのも良いだろうが、そう信じること自体が、それによって精神的世界に入りこむことである。こうした一元的な考え方は、すべては精神だとする唯心論としても存在する。肉体的には一つの動物に過ぎず、生物としての法則から一步も出ることのできない人間なのだが、その肉体をもった人間というものを客観的に眺め、比較し、追及し、考えて精神的な世界を構成した。過去をたどり、未来を夢に見、現実泣きもし、笑いもするのが人間である。こうした精神的な構造の世界を持った日、その構造を言

語によって構成して他と共有するようになった日、その日から人間は他の動物とは異なったものとなったと言うべきだろう。物心二元のものになったのである。この時に一線を画するとき言語についても、この地球上に存在する多様な言語は、とうてい一つに還元できないものである。この地上には純血な人種はいないというほど互に交り合っているが、言葉の数だけ異邦人が存在する。しかしその言葉の差や人種の差を超えて人類は一つであるといった共通の意識や感情も持ち合わせている。ここに一元論への憧憬が生れるが、一元論は神またはそれに代る物質に起点をおかざるを得ない。

こうした人類愛の基調となる意識や感情を持っていながら、人類差別が行われたり、同じ民族の同じ社会の中にすら階層があり分裂があり抗争も行われる。そればかりか、その社会の中の至って小さなグループの中ですら分裂、抗争があり、それをかざる我田引水の理論があり、ゲバまでも正統づけられる。人間はどこかで位取りを間違えているらしい。

僕が石川さんを訪ねた頃、八太氏たちが思想の純潔などと称して石川さんに毒づいていたが、同様なことが戦後に岩佐老人をめぐって純正無政府主義をふりかざして石川さんたちをサンジカリストと呼んでいた。八太氏は

キリスト教の純福音派の行き方を持ちこんだのだろうが純福音も純正キリスト教も主観的な考え方に過ぎず、純正無政府主義も同様だ。思想の純潔とは単なる比較に過ぎず、客観性を持たない限り眼鼻鼻を笑うの類でしかない。これは単に排他性で、中核や革マルの主張と同じだ。そのために人命まで落しては仏教という外道の所業である。それでも共産党、社会党、自民党の政治屋共に比較したら、いくらか純粋なところもあるかも知れないが、それは稚気粉粉だからである。

罪のない者（純粹な人間）はいないといったキリスト、悪人（疎外され無明の世界に迷う衆生）こそ往生するといったしんらんこそ人間生存の原点を示したものである。濁世に生れ、その中で生き抜く僕等は現世の矛盾や汚濁に染まっているのである。

×

竜谷大学の靖国研究会の若い諸君が「天皇制と靖国」とに対決しなくてはならなかったことについては、梅原正紀氏との座談の中で語られている。全共闘運動の後退期の一九七一年六月に『沖繩一三里塚一靖国闘争勝利、学費値上げ阻止竜大闘争勝利』をスローガンにかかげて大宮学舎でバリケードストライキをやった時、バリケードの中で、自主講座「靖国法案」をとり上げたのが発端

だった。

学生運動が後退した後、週一回の原則でレジメを作成し、年一回の連続講座『靖国講演会』を開き、日ごろの知的営みの総括をその講演会で講師との討論で確認して行く方向をとった。この講演会の第三回目には秋山清君が講師として出ている。

学生の一人、B君は語る。「寺院に生れて、いわば「念仏」の家庭環境で育ったのですが、靖国研究会に出会ったということは、僕にとっては大変なできごとであったのです。靖国研究会に出会う縁がなかったら、くだらない坊主になっていたかもしれない。ただ与えられたものを受入れる「ありがたや」式の僧になっていたのかも。』そしてB君はさらに『花は咲かないかも知れない。だがおかげさなれば僕の全人格、全生活に関わる問題となった』という。梅原氏のいう「コケの一念」、バカ、つまり世俗的価値意識にとらわれないありかた（すなわち、宗教の目指すもの）となったのである。

A君は言う『象徴天皇制とは実質的に、国家神道体制だということですね。日共の場合、党勢拡大路線上にそって高度生長しているけれども、この象徴天皇制をむしろ温存再生産する役割をはたしているし、国家神道の拡大再生産を行っている」と見られますね。「国民のための

政治」をスローガンにかかげながら、これほど国民を蔑視し愚弄している姿勢はないですね』。

これに答えた梅原氏の話は面白い。「このあいだ共産党の上田耕一郎参議院議員とエコノミスト（76年2月24日号）の誌上で、宗教の問題について話合ったさいのことです。72年の8月に宮本顕治委員長が「世界」という雑誌のインタビュー記事で天皇制の問題にこたえて、天皇宗というものがあっても、それは「信教の自由」だから、あってもいいと言っている。ただし政治制度としての天皇制なら、わが日本共産党は断固として許さないと話していた。それはおかしいのではないかと上田氏に僕は言ったんだよね。すると上田氏は、明治生れのおじいちゃんやおばあちゃん天皇を現人神として尊敬しているが、それはそれでいいじゃないかというんだ。そのレベルではとり立てて社会に害毒を流さないという。日共では形式論理的に政治制度としての天皇制と宗教制度としての天皇制と二つに区分して、無害な天皇制と有害な天皇制があるというのだ。これは根本的におかしい。天皇が象徴になったり、かつては政治制度のトップにすえられたのは、矢張り天皇に神聖性があればこそと幻想されたからでしょう。つまり天皇を尊しとする宗教的観念が政治制度としての天皇制を支えている仕組みでしょ

う。天皇を支えるまやかしの宗教観念をうち破る営みを放棄しておいて、反ヤスクニをスローガンにかかげる社会主義政党とは、いったい何なのか。竜大靖国研の掲げるスローガンのように「靖国法案粉碎、天皇制解体」を同時にやらなければならないのは当然のことです。不可分の問題だ」と、単刀直入的なA君の言葉を説明している。もう少し補足すれば、「レーニンにはじまってブレジネフまで、そして中共でも、ヴェトナムでも、東欧でも、委員長、書記長、主席などトップの者の写真がいたるところにがざられて、個人崇拜が行われている。呪術宗教的偶像崇拜手段によって権力支配を安定させるためである。戦前日本の天皇の御真影礼拝の大衆版であり、象徴天皇制と政治天皇制の併用である。今仮りに共産党の革命（政権にありつく）が実現したとしたら、現在の野坂象徴天皇をどうするか。無害天皇制という現天皇温存ができるだろうか。権力主義者はいつでも嘘をつくものなのだ。常に一元的であろうとしてピラミッド型になる権力機構が二つの頂点をもつことは有り得ない。二頭政治、三頭政治は一時的現象に過ぎない。権力者が民衆に容認する信教の自由は呪術宗教的民族宗教ヤスクニあるいは無名戦士の碑である」と言える。

権力に強制されて戦場に命をすてた者の魂が本当に帰

言っている。宗教自体の底にも大きな社会革命の問題が残っている。

×

わが内なる靖国の中で、「戦後、ようやく憲法体制が変り、『信教の自由』が保障されたものの、三十年を経た現在、それがなしくずし的に侵されていきつつあり、靖国神社問題が、それに拍車をかけるものである以上、そのような事態を、私は手をこまねいて傍観しているわけにはいかなかったのである」と語る、力久隆積氏は、「私の属する善隣会でも、教祖の修業時代が戦前であったので、心ならずも国家が認めた宗教のカンバンを借り、公認宗教であることを装うことなしでは、宗教活動ができず、教団沿革史の中で、説明のつかない汚点として残ってしまっている」と鋭く自己（教団は自己を展開する場であるが故に）を批判している。

単なる利害共同団体だったら「汚点」という必要はないだろうし、共産党だったら有害宗教と無害宗教に分けて、権力者の牙をかくしもする国家権力に迎合して、天皇を頭にいたく呪術的国家神道を認めることもできるだろう。「国家権力と妥協することは宗教の墮落だ」と叫んだ内村鑑三氏にまつまでもなく、教団の官僚化にも鋭く対決するところに個人の自由、宗教的自由がある。

りたいのは母の懐ではないか。ヤスクニの神官が張り上げる奇声の魂呼びで、母の懐をはなれてまで、旧軍隊の上官の下に集って奴隷集団を再現したいだろうか。自分から生命を天皇に売り渡した職業軍人（そして恩給もたんなりもらっている）のヤスクニだったら話が分る。無理に欺されて引っぱり出された兵士（路頭に迷う家族もある。恩給はどうなのか）は死んでも奴隷なのか。

×

一概に呪術的民族宗教を否定するのではない。政治に利用されて民衆欺瞞の手段になることを警戒せねばならないのである。子供の世界は呪術的世界だし、人間の知性の成長過程に呪術的民族宗教要素の存在を否定出来ない。世界宗教にもそうしたものは含まれている。そこに哲学的反省があるかどうか、そしてそれを民衆欺瞞のために利用する政治的態度の有無が問題なのだ。

×

二葉憲香氏は「仏教が国家権力と結びつき、民族宗教と習合することによって、仏教の主体的立場を喪失して権力の手段となり、呪術宗教となり終った」こと、『世界宗教として人間の普遍的尊厳を基礎づける役割を忘却するに至った』ことをなげいている。しんらんは寺院宗教を否定し、キリストもエルサレムの神殿を破壊せよと

しんらんもこの自由のために越後に流され、関東を流浪した。しいたげられた民衆の自由を回復するところに彼の宗教があった。彼の宗教を受入れたのは最下層の人々、前世の悪業の故に苦しむと言われる悪人だった。

×

少年の日、旧約聖書の伝道の書を読んだとき、「あゝ、しいたげらるゝものの涙ながるる」のことが僕の心にしみついてはなれなくなってしまった。今、も一度新しい訳で読み返して見る。「私はまた、この世でおこなわれるしいたげのことを思った。しいたげられている人々は、涙にくれ、慰めてくれる人はひとりもない。そこで、私は、死んでしまった人の方が、まだ生きている人より幸せだ、といった。そして、まだ生まれていない人、この世の悪行を見ていない人の方が、まだ生きている人より幸せだといった」

宗教はこうした民衆の絶望から生れる。その発端において民衆が「みずから解放するため」の集団行動だったので、呪術的民族宗教とは異ったものを持っている。「宗教は民衆の阿片である」という場合、宗教を呪術的民族宗教を混同する権力主義者の詐術がある。

労働者の解放は労働者自身の手でフランスの労働者は叫んだ。労働者、農民、ルンペン、底辺の民衆が、そ

の底辺をゆり動かして上層構築を消滅させることが革命なので、労働組合も農民組合も単なる利害共同体以上のものでなくてはならない。

ここで革命といったのは、シナ語の意味での「天の命を革める」という、政権交替を意味してはいない。このシナ語の文字通りでは毛沢東も立派な革命家だし、共産党の望む革命も政権奪取だけのものだ。真に民衆が要求するのはレヴォリュシオンで、あらゆるものを巻きこんで、権力を消滅させることだ。革命というシナ語を訳語にしたのは大きな間違いと言いたい、ヨーロッパでもロシア革命などにレヴォリュシオンを使っているのだからやむを得ない。政権獲得だけの革命ではないと言いたいのだらうが毛沢東は文化大革命などと称している。アナキストが社会革命と称するのは政権奪取の革命による天下りの官僚支配を否定するからだ。

x

竜谷大学の学生諸君が、天皇制と靖国に対決する姿勢の中には、浅薄で皮相的なマルクス主義者たちと異って、深く人間そのものに根ざしたものであることを知る。

シコシコと続けて、今後に生み出すものに注目したい。

ベトナム反戦兵

《ケネス・ライザー》の裁判

鈴木 光一

ベトナムの戦争状態が終結してはや一年が過ぎた。その間、兵役を拒否したり、日本等で反戦活動に参加してヨーロッパ等へ行った人々も徐々に米国に帰りつつある。そしてそれらの人々に対する法律違反と市民権剥奪などの裁判が現在いくつか行なわれている。良心的兵役拒否、反軍反戦兵士の人々はそれらの裁判をカナダで、ヨーロッパで注目しつつ見ている。

モンタナ州ビュート市で行なわれているケネス・ライザーの裁判はその際、一つの注目すべきものとして受けとつてよいであろう。この裁判の判決は一九七五年夏に国の下級裁判所より示されたが、それはライザーの主張を認めるものであった。ライザーはベトナムにおける兵役が男子だけであったことを不満とし、男女平等の思想に立って当時の徴兵制を違憲と抗弁していたのである。当時の兵営法は一九七一年のものであり、この法律は二年ごとに改訂延長されていた。しかしこの法律は女性の兵役を義務づけておらず、そのかぎりではライザーの主張は根拠のないものであった。しかしライザーは当時よ

り強力に展開され始めたウーマン・リブの論理を用い、

それたちに向つたのである。一七八九年の憲法制定会議と一七九一年の制定会議によって修正を行い、一応の市民の平等保護を法的に形成していた。しかし、この市民の平等保護は法的形式に立脚し、実質的平等を保証してはおらず、選挙権における女性の除外などにそのキズを残していたのである。今日、米国は男女の兵職を他の職業における男女の差別を禁止したように、本人の希望より認めている。このようなことも最近のことであり、ベトナム戦争当時はこのような状況ではなかった。このような背景をもちながらもライザーの裁判は重要な判例を示したのである。

ライザーは憲法の平等規定を盾にとり、兵役法の違法性をあげ、違法性のある法による罰則を拒否したのである。下級裁判所はこの主張を認めたが、控訴審が現在行なわれている。ライザーは又、女性が戦争では除外されている理由、どうして女性では戦争がかえないのかの理由の立証責任を政府に求めている。政府は戦争が男性的であり、このような行為における女性の役割を軽視するがゆえに、兵役法は有効であると主張しているからである。ウーマン・リブの先例をうけた人々は政府のこのような考え方に反撥しており、ライザーは下級審で有利な

判決をうけたのであろう。控訴審がまたれる。

最近の知人の手紙によると、このライザーの裁判はいくつかの点でその影響が制限されているということだ。すなわちこれが下級裁判所の判決であること、そして一人だけの判決でしかないこと、さらに性差別による差別を当然と認めている人々がこのような行為に好意を持っていないこと、などである。しかしこの判決は多くの人々が注目しなければならぬ。現在、政府は下級審の判決にたいして問題にしていない。それはこの判決とその審理、被告側主張が他の審判では利用もされていなければ、注目もされないからである。政府は下級審の気まぐれの判決としてこの判決を無視しようかとも考えている。

この判決をもっと多くの人々が知らなければならぬ。それはこの審判を真に充分審理して充分なものとし真に民衆の婦人に対する意識変革のために利用するためにもそれは国家における国民の問題ではなく民衆の意識変革のためにも。国家は裁判所という行政機関（司法にあらず）を通して民衆の意識変革の過程を理解するし、ある場合には民衆の意識変革の荷重に軍の一人として行動しなくてはならぬことを理解するであらうから。

日本の裁判所ではこのようなことは望むべくもないが

外国の例であろうともこのような例が宣伝されるなら、日本人々にもいくらかの考察の機会を与えるものとなるであろう。裁判所を国家意識から解放し、民衆のものとすること、いま米国は社会意識のいろいろの混在から裁判所を国家のものではなく民衆のものとしてとらえる人々が多数おり、裁判官の中にすら、そのような傾向を支持する人々がいるのだ。日本の例と考えるとエリート存在の意義を露骨な型で主張する人々によって裁判官の特権的存在が支持され、裁判官は特権意識の中で特権を形式的に付与した国家に従属することに甘んじている。かかるばかげたことがあたかも自明のごとく行なわれ、しかもそのような偏見の中に立って裁判が行なわれている。この裁判の一つには婦人の社会的地位に対する前進と反戦論理に対する聴聞を広げたがそれ以外に我々には裁判そのもののあり様を考えさせる。その意味でも重要な裁判であった。

江川允通氏に連帯を

ハギシン

一九四四年、東条内閣が『日本評論』『中央公論』『改造』庄殺のためにフレイムアップした横浜事件がある。この犠牲者は拷問で殺されたり、出獄後も病死したり

した。その獄が横浜刑務所だったか否か、私は知らない。ともあれ、この受刑者は大戦中「図南報国隊」として駆り出され、トラック島海軍基地の建設にあたった。そして、爆死、病死、水死の悲運をたどったのである。今この刑務所に、江川允通氏がつながれている。「リベルテール」発足のころ、氏はよく拙宅へ編集や発送の応援に来られた。支援する会は熱心に活動してくれているが、かされて多くの支援をお願いする。以下は八月四日、氏を見舞った時、本誌を通じての伝言である。

「リベルテール」にご無沙汰しているが、充実しているようで、蔭ながら喜んでいいます。

二、三年前、事件のも少し前から、私なりに色々考えた事を追究していたが、とんでもない事で中断してしまった。余り熱中していたので、皆さんにご無沙汰して不義理を重ねて申し訳ない。今それなりにその時の事を回想し、書いています。

食欲もなく、運動もできず、体が弱っている。然し皆さんから手厚い見舞いを頂き、非常に有難い。中には存じ上げぬ方もいる。相互扶助の原理と実感を体験した事は一つの収穫であった。人生体験豊かな人なら或いはわかって頂けるかも知れないが、人間は紙一重の運に左右されるものだ、と痛感した。私は今度のえん罪で、無実

の罪で苦しめられた坂本清馬の気持がよくわかった。また国家の本質も体得し、憤っている。

礼状を出して反ってご迷惑をかける方があるかも知れないが、手紙が制限されているので、一々お礼をいえないのが残念だ。獄外の一般市民に対する権利の侵害でもある事を怒って頂きたい。皆さんに呉々も宜しく。

野火

持廻りで拝見している誌紙について、今回は私の受持ちになった。総体的にミニコミは少くなったと言うが、手渡されたのは量質共に大部のものである。一通り読んでまたこれまでにみたものも加えて案内しよう。記憶に残ったテーマ別にすれば、天皇制批判（人間改造一〇一五号、久米島の虐殺・久米島訴訟を支える会趣意書）少数民族・被抑圧民族からの告発（林景明氏を囲む会、岡本直一裁判資料・アイヌ裁判を支援する会）反公害運動の状況（アボリアNo50）障害者の映画案内、コミューン活動（ミルキーウェイ・銀河3、月刊協同体第一四一号共同体社会No9）教育の場の現況（自立第5号、パソナルマガジン5・7月合併号中ちわこ只今奮戦中、あぼりあNo51あゝ給食ノ）他に刑法改悪の指摘、NHKの公共

放送の実態告発（視聴者通信）森永製品ボイコットの呼びかけ、ロッキード事件のなかで「戦後」を問い直すシンボジウムの案内等々が印象深かった。いづれの情報、コメント、主張、訴えもすべて筆者の真情や調査結果、事実の確認からでて居り、文章の巧拙、刷り物の鮮明不鮮明の境界を容易に踏み越えて、読む者の心に触れる。これがミニコミの最大の利点なのだ。

☆「REVOLT」No.3 グループ・レボルト発行、連絡先姫路市亀井町カメルビル2F、T・J・W・S・気付、山田正春（前衛その人間的資質Vでは前衛の意味を問い直し、暮す実存の中から知的追究を通して前衛主体が徐々に姿を現わすだろうとしている。その資質とは「いい意味での厳密な即物性。何ごとに対しても確実な目測能力。すでに度々くり返した冷厳な克己。またよく陥りがちな激越な調子による無内容なロマン主義の排除、そして不言実行の能力。さらにいえばしたたかな政治的な才知とそれに見合った思慮浅からぬ節度、等」これは個に求める資質として非の打ちようのないものだがそれが少くとも知識があって労働に従っている現在の若い人びとの人格になり得たら、新しい文化の創造の担い手になることだろう。期待したい。土佐中村記は幸徳の墓を訪ねるの記で、死してなお中村裁判所の真裏にあるとは、

司法の横暴を今だに告発しつづけているようで面白い。

坂本清馬宅の訪問が書かれている。国家とコミニークロポトキンから一は、アナキストこそ「権力論」の研究が必要であり、これまでのようにそれに代るものとしての「自由合意」や「自由連合」を持ちだすだけでは十分だと指摘している。どこまでが指導する者と指導される者の関係でそれが支配と被支配に転化するかなど全く新しいアプローチで始めてみるとよろしからう。相手がクロポトキンでは課題のすべてに言及すること追われ、論旨の拡散しているのが残念。

☆直接行動第2号 小特集「私と非暴力」は、1号を読んだ読者の感想や反論で編んでいる。それは「なかまの声」でもあり、それぞれの個性がでていてよい。私は未だになぜ非暴力なのかよく判らないから、むしろ知識では反ジョビニズム、非暴力は知っている積りだが、この空間で展開されている運動に注目するのは、それが現実的に何かを具体化しようと努力している故である。

なおイオム通信に同封された「墓標なきアナキスト像」をめぐる私的な問題についての私の個人的意見は、ここまでこじれる前に話し合う場は持てなかったのかということである。得てしてアナキストだから一は言うべきでないとか、一すればアナキストではないとするの

はそれこそ個人的な期待過剰が締め付けの類で私怨の素因になる。求めるのは連帯であって私闘ではない筈だ。しかし不当に扱われたと思う向きが異議の申立てをするのは当然であり、関係者に告知して調整できる組織があれば申し分ないのだが；現状では当事者同志の友愛による解決しかなからう。

読書から

△クールベ 坂崎坦著岩波新書、フランスの画家クールベ（一八一五—一八七七年）はブルードンの友人として写真派の雄として知られている。本書は彼の生涯について概説しているが、作品「石割人夫」をめぐり芸術と政治の問題に触れ、著者はクールベが社会問題に参画出来るチャンピオンとしての役割を持つに至ったのは画家として不幸であったとする視点だ。巻末にクールベ覚え書としてブルードンの八芸術の原理およびその社会的使命についてVが付されている。「すなわち絵画はその時代の表現でなくてはならない。その時代の倫理的役割を果すものでなくてはならないからである」ブルードンの芸術観はここに要約されよう。挿話として「ブルードンと二人の娘」（一八六五年作）では夫人も描かれていたのが、不評で塗りつぶされたのだそう。私はバリエード上や雄たけびをしないこの平和なブルードン像には以前

から好感を持っている。

△大逆事件を生きる一坂本清馬自伝、新人物往来社刊、民衆の歴史発掘の時流によって、彼の個人史が出たという感じである。在獄25年に亘る大逆事件の無この被害者として、国家権力の壁は余りに厚く、彼は自己の気力と反抗心で勝抜いたのだ。男は誰でも年をとると翁になるらしいが、身にあまる困窮の中で七千冊の蔵書を整理しながら本を読み書きつづけた執念は貴重である。もっとも若い日の彼が巢鴨平民社を飛び出したのか秋水に追いだされたのかは検討の余地があるし、当事者の体験も風化、忘却、脚色等にわかに判定できない。

△謀反論 徳富健次郎著 岩波文庫一五七七。八天皇陛下に願ひ奉るVハ謀叛論Vは明治の知識人としてまたキリスト教徒（トルストイに私淑し面会している）の立場から大逆事件判決の非を鳴らしている。大石誠之助関係の沖野岩三郎、高木・崎久保を担当した弁護士平出修等は事件に間接的に関係していたが蘆花は在野の作家である。それだけに知的良心としての説得力はハ難波大助処分についてVと同じく感銘深いものがある。

（文責・はしもと）

海外だより

☆フリダム Vol 39 No. 18 では「アナキを組織する」の標題で、組織論につき文献検索をやっているが組織論そのもののズバリのノウハワはないようだ。

☆過日のポーランド暴動で労働者の大量逮捕が行われ、映画「灰とダイヤモンド」の作家ジェルツイ・アンドレ・チェフスキー、ポーランド労働党から脱退したジャック・クエロン他が抗議した。アンドレ・チェフスキーは言っている。

「私の言葉は言葉だけで労働者諸君の現下の苦しみの重みに比べれば僅かなものかも知れない。しかしこれらの言葉こそ私が諸君との連帯を可能にし、私の同情と憤激を表明する只一つの方法なのだ」彼の地の社会的重圧の拡がり判るといふものだ。

☆N・ウォーターはG・ウッドcock評に関連して読者からの便りに答え、H・リードは爵位を受けた頃からA運動への影響力を失ったとし、リードの思想は50年代で終り、60年代の百人委員会（反ベトナム）で逮捕者が出た際、暴力・非暴力に関連してリードが委員会を離れたのを取りあげている。なおアレクシー・コンフォートは現在ボルノまがいの訳本がでているが、性科学の大家に

ミハイル・バクーニン(1814-1876年)その名は19世紀最大のロシア革命家として世界史に名高い。1864年彼はアナキスト、連合主義者、無神論者としての理念を自己に構築するとともに、英国ロンドンで国際労働者協会が創設(1868年)されるやスイスにおいて活動を開始した。この期の彼の運動はイタリア、スペイン、フランス、ベルギー、スラブ諸国に及び、たまたま協会中枢(総評議会)の頭脳となっていたカール・マルクスと衝突しここに激しいイデオロギー闘争が展開されたのである。バクーニンがヘーゲル哲学の信奉者から出発したのは、彼の初期論文に詳しい。弁証法を自由に駆使して現実の事象を説明することもできた。その彼がマルクスと確執しなければならなかったのは何によるのだろうか。

マルキストの強権的社会主義とアナキスト自由連合社会主義はどこにどんな差異があるのだろうか。これまでマルキストの側からするほとんど一方的なバクーニンに対する中傷の中で、不当に軽ろんじられてきた彼の社会思想、革命の実践理論、神と国家、集権制と自由連合制、自由・反逆・社会主義、労働者階級はどうあるべきかを含めて研究の資料になるようアンソロジーを編んだのがこの一書である。

なお本年はバクーニンの死後100年に当たるので、日本において紹介されたこれまでの文献目録、有名な彼のシベリア脱出後立寄った港・横浜での追跡研究。更に内外の感想文を収録して〈われらのバクーニン〉とした。読者諸兄姉の熟読を期待します。

【内 容】

▶詩われらのバクーニン ●F・エルター

▶バクーニン死後100年

1. バクーニン小伝 M・ネットラウ
2. バクーニンの臨終 A・ライヒエル

▶バクーニンの伝言 編・訳 はしもとよしはる

自己を語る	1848年2月の革命
存在の本質	労働について
哲学的諸問題	西欧の労働者階級
矛盾について	ブルジョワ意識
自由について	政治否定
聖反逆	ブルードンについて
国 家	マルクスについて
科学について	反マツツイーニ
社会主義	ロシア革命

▶付録 第一インターナショナルとバクーニン

- ☆インターナショナルに就てのマルクスの意見
- ☆インターナショナルに就てのバクーニンの意見
- ☆コレクティヴズムと相続権の廃止
- ☆マルクスの極秘文書

- ☆普仏戦争とパリコミューン
- ☆労働者階級の政治参加をめぐる
- ☆バクーニン派の反撃—ソソヴィユ会議
- ☆バクーニン追放劇

▶資料・第一インターナショナルとブルードン派、コレクティブ派、バクーニン派団体の会議経過他・ノート

バクーニン文書の集成者たち 梅田順子

▶バクーニンと日本

1. バクーニン紹介の起源 若山健二
2. 日本におけるバクーニン研究の書誌 山本二夫
3. バクーニンと函館・横浜・神奈川 若山健二
4. 「バクーニン全集」の想い出 望月百合子

▶われらのバクーニン

- バクーニン頌 坂入純二編
- バクーニンとルクリュ 三浦精一
- バクーニン寸評 高石 新他

- 体 裁 A 5 版 200頁前後(写真多数)
- 発売予定日 9月下旬
- 定 価 ￥ 800(郵送料込み)
- 申 込 先 リベルテールの会
東京都練馬区大泉学園町2190
荻原晋太郎方 振替東京4-133830

納ったところで、N・ウォーターからは論難されている。☆ソビエト旅行をしたアーサー・モイゼはフリダム紙に△赤の広場での抗議Vを書いている。ソビエト社会の官僚制による統制をマヤコフスキーの詩句によって対比させ、それでもロシア民衆の活力には敬意を表明している。ロシア人の酒飲みの一入と△アナキズムVを祝してウ・オットカーのグラスをあげ、△個人的な歓楽Vを尽したあと赤の広場で抗議することにし、フランス人の仲間一人とビールびんに小便を詰め、昼間ツリストにまぎれこみ、広場の周辺に常駐するパトカーの眼を盗んで、そのビールびんを頭の上にのせ、石畳に撒き散らした。△そのつは僕の手、靴、赤い広場に飛び散り、フランス人の友人は夢中でカメラのシャッターを切ったVその後旅行者の群にまぎれ去ったのだがロシアの警察は上司に報告するのを怖れ、アーサーに対しては△お前を憎悪するI hate you Vと罵られたそうだ。△だがこれからメーデーの日には百人のうち五〇人は武器の展覧や首脳達の挨拶の間に赤い広場で小便をぶちまけたばかりのことを覚えていて呉れるだろうとある。

☆ル・モンドリベルテール7・8月特別号はブサンソンで行われた第31回アナキスト連合の年次集会を報告している。160名の代表が集会し、各グループの自治、反戦

決議、環境汚染の問題、誌紙の内容強化を話したと言う。他にエリゼ・ルクリュ、ブルードンの関係記事がある。

☆エスポワール7月11日号はバクーニン死後百年記念を社説で取りあげ、今日におけるバクーニンの業績を賞揚した。

死 亡 通 知

長芝義司さん死去(9月7日)

中野区沼袋1-16 芝美容院

無支配への道

付

無政府主義組織論

無政府主義とサンジカリズム

黒色戦線社刊 ￥三〇〇

・リベルテール原稿募集

論文、エッセイ、感想、ルポなどお寄せ下さい。

・リベルテールサロン

毎週火曜日(午後6時) 水道橋駅近くコージでの集り、気軽にどうぞ!

物価ハ
鯉登リ



われらの バクーニン

—バクーニン死後100年記念特集—

現在、左翼と右翼の区別は大したことでない、戦後民主主義の虚妄性は、ナショナリズムの復権と再発見によって明きらかだと言う。果してそうだろうか。バクーニンが闘ったのは、強権的コミンニズムと共にイタリアの国民運動家マツイーニに代表されるナショナリズムだった。マルクスも普仏戦争後ナショナリスト（汎ゲルマン主義）の一面がある。共通項は自国民の優秀性を賞揚し、その影響力を他国民に振うことだ。だがその前に自国民を国家に隷属させ、他国民を征服する。国家は災厄だ。国家が戦争する。バクーニンはそう呼びかけた。



Michel Bakounine